

教職課程センターだより 第19号

発行日 2018年3月28日

巻頭言 「教職課程履修の意味を問う」

教職課程センター副センター長 橋本 洋治

なぜ教職課程を履修しようと思ったのですかと学生さんに尋ねると、さまざまな答えが返ってくる。もちろん、教師になりたいからという人が多いのだが、スクール・ソーシャルワーカー、スクール・カウンセラーなど学校教育に関連する職業を目指している方もいる。ただ一方で、何か免許を取っておくことが就職に有利（と思い込んでいる？）、親からの勧め、なんとなく不安など、やや主体性が低いと感じられる回答もあってなかなか幅が広い。ご存知の通り本学の場合、一部の学科・専修を除いてはその履修が卒業の必修条件になっているわけではない。つまり、教師を目指す方を除けば時間的、肉体的にもある意味で「無理」をして履修していることになるのである。果たしてそこまでしてやる必要はあるのだろうか？おそらくこのようなことを自問自答しながら学年を経ていく方もいるのではないかと。

誤解しないでほしい。現時点で教師を目指していないのであれば履修しないでほしいと大上段に振りかぶって言うつもりはない。ただ、履修する以上その動機如何に関わらず、積極的に学ぶ姿勢をもって臨んでほしい。そうすれば仮に教師にならなかつたとしても人生に役立つことはきっとある。それは教育がすべての人間に関わることだからである。

私は教育原理という授業を担当している。この科目の中心的な学習課題は、「教育とは何か」を考えることだ。そして、その材料の一つとして受講生各自に自己変遷史なるものを書いてもらっている。簡単に言ってしまうとこれまでの人生を素直に振り返ってもらおうのだが、このような作業を通して自分自身を成長させてくれたものが、学校・教師だけでなく、家族、友人、近所の方々などさまざまな他者の存在であったことに改めて気づく。さらに、それは大人（年長者）から子ども（年少者）への働きかけに限定されるような一方的なものではなく相互的なものであったりもする。学級の仲間同士で学び合ったり、ボランティアや実習先などで子どもたちから教えられたりという経験がある方もいるだろう。このような営みを広く教育と捉えれば、クリーク（1882-1947）による「人の群れの中では、どこでもいつでも行われている精神的な根本機能」との教育についての説明を待つまでもなく、それはいつでも、どこでも、だれとでも起こりうるものであるということが出来る。すなわち、この社会で生きている限りは教育に関係のない人間なんていないし、その意味ではいくつになっても成長していく可能性を持っているのである。したがって、より人生を充実させていくためにはこのことに自覚的であった方がよいだろう。

確かに、教職課程には教科に関する専門的知識や授業技術など教師になる上でその関連を直接連想しやすい科目が多くある。ただ、それらとて上述のような教育への根本的な考え方が基礎にあって存在している。紙幅の都合上やや強引にはなるが、教職課程を履修するということは、単に狭い意味での「教員」になるためのものではなく、人間としての教師のあり方について学んでいくということになるのではないだろうか。もしそうであるとするならば、極論だがそれは教師になろうがなるまいが自分自身がこれからどのように生きていくのかを考えていくことにも繋がっていくように思える。

合格体験報告会に参加して、思ったこと・考えたこと

<小学校分散会>



転機を与えてくれた先輩の体験談

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修3年 野口結衣

合格体験報告会に参加して、一年後の自分の姿を明確にすることができました。

私は実習を終え、教師になることを悩みました。「子どもが好き」「子どもの成長を支えたい」という気持ちは、さらに大きくなりましたが、教えることの難しさや知識不足であるがために、子どもたちの質問に応えることができない自分の無力さを痛感しました。そんな私にとって先輩方は、転機を与えてくださいました。合格体験報告会でお話をされた先輩は合格された方でしたが、教員採用試験を受けた全ての先輩方の熱意と努力を感じました。

先輩方に共通していたことは、教員採用試験はゴールではなく、通過点ということです。教員採用試験の勉強の中に必ず「子どもたちのために」がありました。日常生活の中で子どもたちが興味を持つようなことを自ら探し、より知識をつけたり、採用試験の勉強の中で子どもたちの姿を考えたり、先輩方の勉強方法や教育観を聴くと常に目先は子どもの存在でした。そして、自分への葛藤があり心が折れそうになっても、乗り越えることができたのは、「こんな教師になりこんな教育をしたい」という気持ちと同じ夢を持つ仲間が近くにいたからだと学びました。

教員採用試験まで半年です。仲間と勉強に励む中で、自分自身が大きく成長できると思いました。知識をつけるだけでなく、仲間から助言をもらうなかで自分と向き合えるからです。そして、「誰かと比べるのではなく自分らしくいること」と先輩方から頂いたお言葉を胸に、自分を追い込み進化し続けたいと思います。

<特別支援学校・中学高校分散会>



忘れられない大切な言葉 仲間の大切さ

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修3年 二村亜里沙

今回、合格体験発表会に参加し、分散会で特別支援学校の合格者の方の話を聞かせていただきました。私の姉も今年受験しました。結果は悔いの残るものでしたが、それを間近で見ていたからこそ、今回参加して何か発見したいと考えていました。

先輩方の話は、自主ゼミのことだったり勉強の仕方だったり、すごくためになることばかりでした。そのたくさんあった中から私は、「仲間の大切さ」という言葉が頭から離れなくなりました。なぜかという、たくさんの先輩が話してくださる中で、どの先輩も言ってみえたからです。試験の内容や勉強の仕方なども気になっていましたが、今回乗り越えられた先輩の言葉だからこそ重みのあるように感じました。

私自身、山口先生に相談させていただき、岐阜県の自主ゼミを立ち上げました。今考えると、この立ち上げにも既に仲間という大切な存在があったのだと気づきました。仲間がいてくれるということ当たり前だと思わず、協力してくれる仲間がいることに感謝したいと思います。

これから、学年末試験も終わり、いよいよ試験に向けて今以上に、力を入れて動き出すときです。筆記試験準備に関しては、自分の努力しかないため、毎日時間を確保し取り組みたいと考えます。分からないことは、仲間に頼り行ってきたいと考えています。また、一人ではできない面接練習などは自主ゼミなどの仲間と協力して行っていきたいです。教員採用試験に向かう人で協力し、全員で合格したいと思います。

新教友ゼミ・フィールドワークin明日香

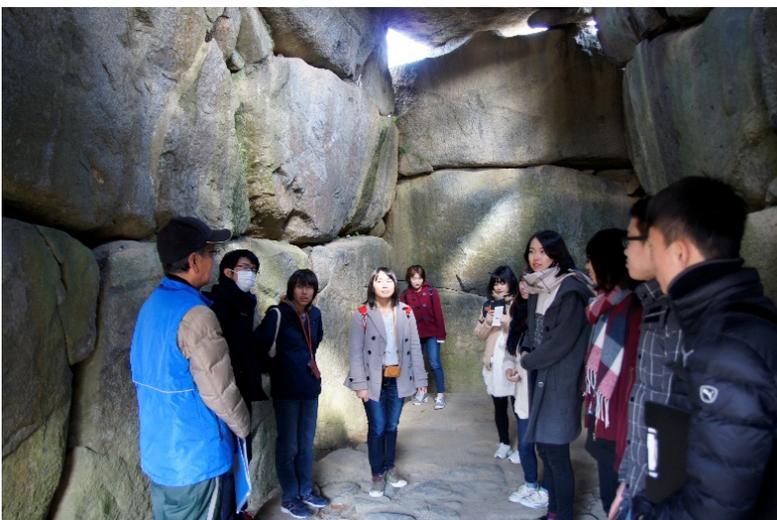
子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修3年 千葉頌子

大学生活も気がつけば3年目を終えようとしている。身を切るような寒さを感じる師走、私は共に教員を目指し学びあう教友ゼミの仲間とフィールドワークを実施した。教友ゼミによるこの企画は、平野先生の時代に始まり10年を超える長い歴史を持つ。

今回は、奈良県の中でも数多くの遺跡や不思議な石造物が眠る明日香村でレンタルサイクルを活用しながら古代史探訪の旅を楽しんだ。

巨大な石を積み上げた石舞台古墳は想像を超える大きさ、重量感で見るものを圧倒する迫力があつた。ガイドの解説を聞きながら、「ここまでの巨大な石をどうやって積み上げたのか？」遺跡を目の前にして素直に考える姿が見られた。今、授業づくりにおいて私たちが課題とする「知識の詰め込みを超える」学習活動が「本物」を見ることによって展開されていた。また、各々が自転車を漕いで向かった飛鳥寺や岡寺、高松塚古墳、猿石、鬼の雪隠・俎等の様々な歴史的建造物・遺物を目の前にした時にも、歴史に触れながら思索に耽るみんなの姿があつた。授業づくりでは、どのように子どもの考える力を発揮させることができるか日々たくさん悩んでいるが、そうした答えは自分自身の学びの中に潜んでいるのかもしれないと感じた。

当日は、身震いするような寒さであつたが、それ以上に静かな緑の山々と田園風景に囲まれた明日香村の空気はとても心地の良いものであつた。また、遺跡には不思議な力があり、その場所だけ時間が止まってしまったような感覚も覚えた。私たちの日常はスマホ1つで簡単に情報を手にすることができる。しかし、実際に自分の目でその景色を捉えることは、検索情報に代え難い大きな価値があると再確認することができた。便利な世の中だからこそ失われがちな手間のかかる感動を大切にしながら、教員への道のりを着実に歩んでいきたい。





教員採用試験 合格体験記

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 古橋花

私は、浜松市の小学校を受験しました。まず、私は愛知県を併願するかどうかを悩みました。愛知県は受験する人も多く、大学の先生や先輩方も試験内容を分かっているの、併願したほうが合格する確率が高くなるのではないかと思っていました。しかし、浜松市と愛知県の試験内容が違う部分が多く、元々記憶力の悪い私には両立するのが難しいと思ったことと、浜松市で働きたいという思いが強かったこともあり、諦めました。

勉強は、小学校の教育実習が終わったところから少しずつはしていましたが、本格的にはじめたのは3月ごろからです。はじめは、教員養成セミナーの問題や東京アカデミーの参考書を使って勉強していましたが、過去問と見比べたときに出題頻度の低い問題に時間をかけるのがもったいないと思い、よく出る範囲や出そうな範囲はミスが少なくなるようにしようと思って勉強しました。一般、教職教養は赤シートなどを使って暗記しました。専門教科(小学校)はマークではなく記述式だったので、東京アカデミーの参考書に加えて小学校の教科書を使って勉強しました。小学校の教科書は重要なポイントや注意するところが大きく書かれていたり赤くなっていたりするので、分かりやすいです。また、教科書の内容と学習指導要領や解説の目標と比較しながら勉強すると、両方を関連付けて覚えられるので効率も良いかなと思います。

面接練習は、いろいろな人とやるといつも新しい意見があつていいと思います。個人に関することは、一貫性があるようにノートにまとめていました。時事問題は教員養成セミナーを読んだり自主ゼミでみんなと話し合ったりして考えを深めていました。面接練習は一人でできるものではないので人数が集まったときに効率的にやるのが重要かなと思います。私は当日、とても緊張して思っていたように考えが出てこないこともありました。だから、志望動機など必ず聞かれることは何度も練習しておくことが大切だと思います。あと、私は表情が大切だと思います。教師に対する憧れや実習での経験は楽しそうに話すといいと思います。

私は、浜松市を受験しましたが、大学に浜松市の受験内容に関する情報が少なく、受験した先輩も昨年はいなかったの、二次試験の内容については詳しく把握できませんでした。面接や模擬授業については、地元の大学に通っている友達や実習のときの先生方に聞くなど自分で情報を集めることが大切です。

最後に、私は教員採用試験を通して、改めて自分のこと、これからのことを見つめなおすことができました。それは、一緒に学ぶ仲間が存在があつたからです。大変なこともあるとは思いますが、困ったときは自分ひとりで考え込まず、友達や先生に相談していったらいいと思います。結果にかかわらず、がんばったことは皆さんの経験として積み重なっていくし、役に立つと思います。がんばってください。応援しています！





教員採用試験 合格体験記

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 中村誉

何を書けばいいのかわからなかったのが私が生きた形跡を書きます。参考程度で読んでいただくとありがたいです。

何をすればいいのか、どのように勉強すればいいのかわからなかったのに加え、友達がみんな受けていたので、東京アカデミーのCDP講座を受けることにしました。この時が3年の冬です。

春休みと前期は比較的時間にゆとりがあるので、サークルやボランティアや旅行などいろんなことをして大学生にしかできない経験をするべきだなと思います。私の場合は春休みにサッカーや馬、海外に行ったり、ゼミ旅行にいたり、春休みにたくさん遊びの用事をいれました。また、週に1回スクールボランティアで近くの小学校の特別支援学級の子どもたちと関わっていました。息抜きっていろんな角度から刺激を受けるので個人的には逆にいろんな視点の考え方を学べたのではないかと思っています。あとは図書館でどれだけ勉強できるかですね。

図書館にはみんながいて心強かったのを覚えています。奥田で教採を受ける人は高確率で図書館にいたので。そのために図書館ではさまざまな情報交換が行われるギルドのようでした。そこでは教採にむけての仲間の考え方、や不安を共有して、みんなで頑張るこの一体感が好きでした。何も無い日は、朝の10時ぐらいに図書館にいき、昼休憩で友達とご飯を食べにいき15時ぐらいまで休憩し、18時まで勉強し、また夜ご飯を食べ、20時から図書館が閉まるまでねばるという日々でした。

一次試験の対策のかけた時間の割合は筆記対策8割、集団討論では2割でした。また、筆記試験の時間の使い方は、CDP講座2割、図書館7割、アドバイザーの方の授業1割ぐらいで勉強を行いました。家ではほぼノートタッチで余暇を楽しみました。また、アルバイトで塾の講師をしていたので、一般教養などはとても楽でした。

集団討論は一次試験で集団討論がある長野、北海道、富山、三重で教採を受けるメンバーを集い12号館の5階で行いました。

4月まではひたすら筆記の勉強で5月から集団討論の対策をアドバイザーのかたなどを中心に行いました。今年からアドバイザーの方がきてくれたのでほんまに助かりました。

三重県で教採を受ける人が日本福祉大学からあまり多くなく、私自身情報収集能力が乏しかったので、三重大学の友達やアドバイザーの方から情報をもらっていました。

結構三重県はアバウトのところがあるのでどんな形式なのか細かいところまでは、実際に教採うけてみないとよくわからんということが多々ありました。

一次試験を終えてから履修カルテの山を終わらし（計画的にやりましょう）その後少し燃え尽き症候群の時期を経て、2次試験の対策を行いました。

三重の2次集団討論、個人面接、模擬授業、実技（ピアノ弾き歌い、プール、マット、リスニング）小論文でした。





私の教員採用試験合格体験記

講師を経験して

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修 2016 年度卒業 都筑優

地元の知的障害児特別支援学校の講師になって、早 10 か月。配属されたクラスは小学部 6 年生。一部の教室で子どもが 16 人。マンツーマン指導が必要な子の数が、配属されている教員の数を超え、集団の授業をつくるのが難しかったり、子どもたちのケンカやパニックに対応したりと、めまぐるしい毎日を送っています。

この 10 か月の中でも印象に残っているのは、やはり「アイス脱走未遂事件」でしょうか。真夏の体育の授業後、急に下駄箱から校外に向かって、靴も履かずニコニコしながら全力で外を走っていく A 君。私は少し遅れてそれに気づき、「止まります！」と何度も叫びながら、私も靴下のまま追いかけてきました。やっとのことで追いつき、荒い息を整えながら「どうしたの？」と私が問うと、なんと A 君は「あいす、ください！」と私に叫んだのです。「暑かったし、アイス、食べたかったんだね…」と思わず笑ってしまいました。その後氷を食べながら、土まみれになった 2 足の靴下を一緒に洗ったのはいい思い出です。

そのような事件が頻繁に起こる日々ですが、こんな風に子どもの気持ちに少しでも共感できたり、子どもが甘えてきたときの可愛さを感じたり、ある子が「都筑先生の授業だ！」と言って喜んでくれたり、といった嬉しい瞬間があります。この一瞬一瞬の感動こそが、教員のやりがいだと感じています。

そんな私も愛知県の教員採用試験に合格することができました。しかし、教員としての生活だけで精一杯な私は、まともに勉強時間を確保することができませんでした。特に平日は遅くに帰宅し、ご飯とお風呂を済ませ、「よし！」と意気込んで問題集を開き、ベッドに入って寝る、といった毎日。当然、筆記の試験結果は散々なものでした。

そんな私が合格できたのは、筆記を面接でカバーできたからです。筆記は本当に準備不足でしたが、面接にはできる限りの準備をしました。去年作った 2 冊の面接ノートを引っ張り出し、推敲しつつ鏡に向かって発声練習。とにかく講師での経験を具体的且つ簡潔に話せるように何度も書き直し、声に出して練習しました。また、同じ講師の先生方と休憩時間に集まって集団面接も行いました。その努力が実ったのか、面接本番では想定外の質問はされずハキハキと答えることができました。愛知県は人物重視です。筆記も勿論大切ですが、その何倍もの時間を面接練習にかけることをおすすめします。そして、できるだけ練習は仲間と一緒に。自分では気づけなかった自分の良さ・改善点を知ることができます。

最後に、こんなことを試験前の皆さんに伝えるのはどうかと思うところもありますが、私は「講師を経験してよかった」と心から感じています。教員の仕事は想像以上に大変で複雑です。私はこの一年、初任者研修がなく責任も少ない中で授業や校務分掌を経験できました。この講師としての経験は採用試験だけではなく、教員としてスタートするための立派な助走だったと感じています。皆さんの中には、試験やその先に不安を感じている人もいるかもしれませんが、どのような結果だとしても、それは前に進んでいます。あまり思いつめず自分を信じて、試験に臨んでほしいと思います。





卒業生からのたより

毎日が衝撃と学びの連続

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修 2016年度卒業
神奈川県特別支援学校教諭 亀山健太

私が日本福祉大学を卒業して、もうすぐ一年になります。この一年は振り返ると常に新しいことの連続でした。今回はその中でも、特に印象に残っていることをいくつか紹介していこうと思います。

・生徒との出会い

私が配属されているクラスは、知的障害のある生徒7人のクラスです。この生徒たちとの最初の出会いは衝撃的でした。知的障害の特別支援学校に配属された私は、視覚障害や、聴覚障害の特別支援学校に配属にならず、安心していました。知的障害に比べ、専門的知識は浅く、自信もなかったことが理由です。しかし、実際にクラスの蓋を開けてみると、難聴の生徒、視野に障害を抱えている生徒、四肢に麻痺を持つ生徒と、様々な障害を持った生徒が在籍していることがわかりました。手話などやったことなどなければ、視覚支援に対する支援もまともな知識もなく、始まる前から不安でいっぱいでした。しかし、悩んでいても始まらないので、生徒と一緒に手話の勉強をし、作業療法士の方から、視覚支援の手段を教えてくださいました。今ではその生徒との日常的な会話を手話で行うことができるようになり、視覚支援も徐々に幅が広がってきたと感じています。

・転校生の登場

1学期が終わりクラス運営も安定し、徐々に仕事に慣れてきていたのですが、夏休み終わりに9月中旬から転校生が来ることを伝えられました。その生徒は私が所属しているクラスに入ることとなったのですが、その生徒が嫌なことがあったり、緊張したりすると座り込んでしまい、意地でも動かなくなってしまうことが多々ありました。今思えば、転校してきてすぐは緊張の連続であり、座り込んでしまうことも仕方のないことだったと思います。しかし、当時の私は授業に参加できていないことから、焦ってしまいました。何とか歩かせようとすることに必死で悩んでいたのですが、それを様々な先生に相談する中で、まずは学校が味方であるということ、本人にとって安心できる場所であることを理解してもらうことを、重視することが優先ではないだろうかという意見をいただきました。その意見を参考に生徒の気持ちを考え、無理に参加するのではなく、まずは本人が気になることややりたいことにとことん付き合い、新しく来たこの学校がどんな場所か、安心できる場所なのか、納得するまで座り込みや寄り道に付き添いました。今ではすべての授業に参加し、座り込みもほとんどなくなりました。生徒の気持ちに寄り沿うという大切なことを改めて実感して出来事でした。

この1年間、本当にあつという間に過ぎていきましたが、たくさんのことを体験し、学ぶことができ、実践に生かすことができたと感じています。今後も教員として責任感を持ち、生徒にとって充実した毎日を送れるよう、日々学んでいきたいと思っています。



生徒がワクワクする授業がしたい

～3年目に改めて気づかされたこと～

社会福祉学部 社会福祉学科 2014年度卒業
静岡県特別支援学校教諭 若杉吏歩

はじめに

私は今、静岡県の肢体不自由児特別支援学校で働いています。大学を卒業して1年間は非常勤講師として別の特別支援学校で働いていました。2回目の採用試験で合格し、今年で3年目になります。現在の所属学部は中学部です。これまでの2年間は教科グループ（準ずる教育課程）に所属していました。今年から生活グループ（知的代替の教育課程）に所属しています。

子どもがワクワクする授業がしたい

子どもは正直です。子どもの言動から授業に対する意欲や関心が伝わってきます。楽しみにしていれば、子どもの話題の中に授業の話がでてきます。朝、学校に来ると「今日は〇〇やる？」と教師に聞いてきます。時間になると、自分から活動の準備を始めます。学習への意欲をもつために必要な土台は、その題材や活動への好奇心だと、生徒に気づかされました。

例えば、あるA君の国語・数学の活動で数の合成（合わせていくつ？）を学習していました。初めは、教師の言う数字に合わせて2つの箱に入れたタイルを操作するという活動でした。最初は、ただ教師が言うように動かしているだけで、やらされている学習のように見えました。そこで、問題の出し方、使用する教材を変えてみることにしたのです。問題を出すときは、A君の家族や学校の教師や友達の名前を出し、ストーリー性のある問題にして出すようにしました。また、教材はタイルを生徒の好きなお菓子（ドーナツ）に変えました。たった、それだけのことですが、生徒は私が問題を読むと、「おっ今日はいつもと違うぞ？」という顔をして私の話をじっと聞いていたのです。1問終わると、「1、お願い」のサインを出して、問題を要求してきました。それからは、数学の活動になると自分から道具を出して私を待っているのです。

他にも、生活単元学習の授業では、お茶の淹れ方を覚えて役割を決めたら、学校の先生たちを招待して実際に飲んでもらい感想を聞く活動を繰り返し行いました。すると、生徒は「今日は誰が来るの？」、「〇〇先生を呼びたい」と自分から授業の話をしに来たり、ペアの友達と話したりする姿がありました。ちょっとした工夫で、生徒の学びに向かう姿勢は変わると感じました。

最後に

教師の仕事は授業づくり以外にも多岐に渡ります。そのため、体力的にも精神的にも疲れてしまうことはありますが、毎日笑顔で登校する生徒の顔を見て、「よし、今日も頑張ろう」と励まされます。やっぱり、私は子どもが好きなのです。今、皆さんが教師になりたいと思って頑張っている原動力は「子どもが好き」ではないでしょうか。それは、教師になっても変わらないと思います。私はそれが1番大事だと思います。その気持ちを大切に日々の勉学に励んでください。



「子どもたちの力を信じて」

子ども発達学部 子ども発達学科 初等教育専修 2012年度卒業
千葉県小学校教諭 瀧川史樹

日本福祉大学で過ごした4年間、教職インターンシップやサークル活動、アルバイトなどでたくさん子どもたちと関わる機会がありました。そこには様々な発達の違いにぶつかっている子どもたちの姿がありました。しかし、その壁を自分で乗り越えたり、他の人に支えてもらって克服していく姿を見て、どんな子にもその子の成長への願いがあることを学びました。そんな子どもたちと接しているうちに私は、小学校の教員になりたいという思いを強めていきました。

大学を卒業後、初めて教壇に立った千葉県の小学校は児童数1000人を超える大きな学校でした。迎えた1年目、何もかもが初めての日々を何とか過ごすことで精いっぱい、大学生の頃に思い描いていた言わば「子どもたちファースト」のイメージの実現はなかなかできずにいました。今思えば、他のクラスに置いていかれないようにと必死で、自分の学級の子どもたちを置いてけぼりにしてしまっていたかもしれません。

それから数年、今では職場環境にも慣れ、現在は5年生を担当しています。今の学級には36人の子どもたちが在籍しています。朝、教室にいと「おはよう先生～」とニコニコ近づいてきて昨日あったことや友達のこと、兄弟のことなど楽しそうに話して、ひとしきり話し終えると満足そうに朝の支度を始める子がいます。ゆったりとした空気が流れる、私の好きな時間です。しかし、そんな様子の子どもばかりではありません。子どもたちはいろいろなものを背負って学校へ通ってきます。親の期待や目まぐるしく変わる家庭環境、友達関係の悩みなど様々なプレッシャーを感じながら生活しています。時にはトラブルを通じてそれが表面化することもあります。子どもたちなりに多方面に過度なまでの気を配りながら、毎日を何とかキープしているようにも感じています。そんな子どもたちとどう学級を創っていくか、いつも悩みながら実践しています。

学生時代に講義やゼミで学んだことはたくさんありますが、その一つ一つが自分自身の礎となり、現場で働くようになった今だからこそ、その重みが増してきているのだと感じています。最近、子どもを「信じて待つ」ということが大切だと考えています。ただ待つのではなく、その子の願いを理解して、必要に応じた環境づくりをすることでその子の力が発揮されればこんなにうれしいことはありません。「〇〇させる」ということばかりが強調されてしまっは誰のための教育かわからなくなってしまいます。そうならないためにも子どもの力を信じていきたいと思っています。

日々変化していく子どもたちに寄り添うことのできる教員の仕事はとてもやりがいのある仕事です。今学んでいることが礎となり、将来皆さんを支えてくれると思います。ぜひ最後まで頑張ってください。応援しています。

教員採用対策 東海キャンパスの取り組み

教職課程副センター長

藤井 啓之（経済学部教員）

経済学部では、教員採用対策といっても、まず①教職課程に登録してもらうことから始まる。1年生の11月のオリエンテーションへの出席が課程登録の要件なので、1年生の早期に（2017年度は6月）国際福祉開発学部と共同で教職相談会を開催し、教職という進路について考えてもらっている。課程登録を済ませたら、次は②教員になりたい、教員としてやっていけそう、と思えるようにすることが課題となる。そのため、教職研究会（サークル）を通じて、東海商業高校で教壇に立たせてもらっている。人前で話す経験を重ねる中で徐々に自信をつけてくる。③並行して、きちんと単位を取るよう指導することが重要になる。中学社会科と高校地歴・高校公民の免許が取得できるが、単位を落として高校免許は片方しか取得できない学生がいる。こうなると、非常勤講師採用はあっても、専任採用は難しい。地歴・公民の両方を取得することの重要性を伝え続けることも重要な教員採用対策である。

経済学部では、目下、公立学校の教員採用試験を受験する者はほとんどいない。現役で合格すると思っている学生も少ない。多くは私立や公立で非常勤講師や常勤講師をしながら経験を重ね、私立での専任化を目指したり、働きながら教員採用試験勉強を行って教員採用試験を受けることになる。だから多くの学生に④私学協会の適性試験の受験を薦めたり、私学協会に講師登録するように指導している。また⑤教職希望者の卒業後に、私学から講師照会があったときに情報提供している。近年、徐々に学力の高い学生が増えてきつつあり、4年生で公立学校の教員採用試験を受験することを意識した教員採用対策にシフトすることが必要になってきている。

国際福祉開発学部では、①3年生の教職課程履修者は同じ専門演習（教職ゼミ）に所属し、ゼミで学生が疑問に思うさまざまな教育課題について意見交換をしながら、教職への意識を高めている。教員採用試験の対策としては、②前期から学生同士で計画を立て、当番制で教採過去問などを準備して、ゼミ前の1コマで勉強会を開いている。③年度後半はCDP講座を活用して、各自での学習を進めている。④専門科目の英語については、TOEICスコア730点、または英検準1級取得を目標として過去問以外の学習も継続している。⑤英語による発信力をさらに向上させるため、学内の「ふくシアワード」に応募して英語プレゼンテーションに取り組み、成果を挙げたゼミ生もいる。また、⑥海外の学校でのインターンシップに取り組み、英語力を伸ばしながら、外国語教育の実態を調査して、日本における指導法との比較研究を構想している学生もいる。さらに、⑦学部1年生科目「国際フィールドワークⅠ」の実践にあたり、2名のゼミ生が在学生サポートスタッフとしてフィリピン班とマレーシア班に同行し、引率教員のサポート業務を担っている。これらの経験は、教採面接での応答の重要な素材となると考えている。⑧4年生のゼミ再開時からはさらに勉強会の回数を増やし、切磋琢磨しながら教採対策を進めていく。



礼儀を持った人間になる

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修3年 吉岡海

私は小学校の教育実習で6年生を担当させていただきました。教育実習前は不安もありましたが先輩方から「とても楽しかった」と伺っていたので、私自身勝手に教育実習は楽しいものだと決めつけていたのが本音です。今、実習をふりかえってみると、たくさんを経験しましたが、なかでも「礼儀」の大切さを学ぶことが出来ました。

実習初日に児童たちと上手く関われなかった私は、どのようにして児童達と仲良くなるか、ということだけを考え実習中過ごしていました。実習前の私の勝手なイメージとのギャップがそうさせたのです。しかし、これは私の経験不足が原因でした。最終的に私は児童たちと仲良くなれましたが、私は「教育実習生としての自覚」を忘れていたのです。

私の指導教官は多忙ななか時間を割いて指導してくださったにも関わらず、「児童と仲良くなる事」のみ考えていた私の受け身な態度はとても「礼儀」を欠くものでした。「児童と仲良くなること」はとても大事なことであるのは間違いないと思います。しかし問題なのは、受け入れてもらっている身として指導教官とともに実習を行う意識が、実習の当初には弱かったことでした。

「礼儀」を欠いた人間が児童たちの前に立つというのは、児童たちに対しても「礼儀」を欠いていることだと私は思います。指導教官には「礼儀」について様々なことを指導して頂きました。私はまず当たり前前ことを当たり前に行うことが、実習を通してこれからの自分に必要なことだと気づかされました。いつの日か「礼儀」を持った人間として児童たちの前に立ちたいと思います。



今後の予定

【新2年生】

教職課程オリエンテーション

美浜キャンパス 3月28日(水) 4限~5限 210教室

東海キャンパス 3月28日(水) 4限~5限 S304教室

教職課程登録

3月27日(火)~30日(金) 17:00まで

※教職課程オリエンテーションに出席後、課程履修費の納入及び課程登録を行ってください。

【新3年生】

教育実習手続き(中学校・高等学校・特別支援学校 教育実習内諾依頼)及び介護等体験 説明

美浜キャンパス 4月12日(木) 3限

東海キャンパス 4月12日(木) 4限

※4年次の教育実習校の内諾依頼に向けた手続きについて説明します。

【新4年生】

教育実習手続き(中学校・高等学校・特別支援学校 教育実習直前)及び介護等体験 説明

美浜キャンパス 4月12日(木) 4限

東海キャンパス 4月12日(木) 5限

※教育実習I事前事後指導のクラス・日程については各学部の時間割冊子を参照してください。